

窯詰めにみる窯場の特徴

やきものを窯に詰めて焼成する際に、自然釉や窯壁の一部が付着しないよう専用の容器（匣鉢^{さや}）に入れます。この時に匣鉢の中で製品同士の溶着を防ぐため、様々な窯道具を使用します。日常食器を主体に生産した西洞 2・3 号窯では、粘土塊を円錐状に尖らせた円錐ピンを多用します。一方、茶陶類を主体に生産した元屋敷窯では、円錐ピンの他に様々な窯道具を用いています。足付板トチは円盤状の板の片面に 3～5 箇所のピンを貼付したもので、ピンには長短があり、長いものは織部の向付類の焼成に使用します。三又トチは、ピンの下半部を三又にし、その先端を尖らせたものです。大鉢や大鉢の蓋を焼成する際に使用されたと考えられます。元屋敷窯では皿類と比べ、鉢や向付など形が複雑なものや大形のものを焼くため、このような窯道具が使用されたと考えられます。



上面



上面



円錐ピン（西洞 2・3 号窯）



側面

溶着資料（西洞 2・3 号窯）



側面

溶着資料（元屋敷窯）



三又トチ

足付板トチ（長）

足付板トチ（短）

三又トチ・足付板トチ（元屋敷窯）

おわりに

元屋敷窯が茶陶や懐石用食器である織部生産の最盛期を迎えていた 17 世紀初頭、定林寺地区では日常食器を生産のメインとしていました。16 世紀後半の操業当初は、どちらの窯でも同じような製品を作っていたのにも関わらず、この様な生産様相の違いが生まれたのは何故なのでしょう。その理由としては、元屋敷窯と競合するのを避ける意味があったのではないのでしょうか。その他にも、やきものを扱う「商人」の影響が大きかったと思われます。茶陶を扱う商人と、日常食器を扱う商人が存在し、それぞれの商人が注文した窯場が異なるため、生産内容に差が生まれたと考えられます。このように安土桃山時代的美濃窯の各窯では、消費地の需要に応じて様々な製品を各地に供給していたのです。

主要参考文献

土岐市教育委員会 1971 『土岐市中央自動車道関連遺跡』
瀬戸市史編纂委員会 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇四』
(財)土岐市埋蔵文化財センター 1998 『定林寺西洞古窯発掘調査報告書』
今井静夫 2000 「定林寺古窯址群の考察」『瑞浪陶磁資料館研究紀要第 8 号』
土岐市美濃陶磁歴史館 2012 『美濃桃山陶の生産―茶陶の流行と窯場の個性―』

編集：中嶋茂（公益財団法人土岐市文化振興事業団）

土岐市美濃陶磁歴史館

土岐市泉町久尻1263 TEL：0572-55-1245／FAX：0572-55-1246

入館料：一般200円(150円) 大学生100円(70円) 高校生以下は無料

＊()内は20名以上の団体料金 ＊3/4、5は入館無料

開館時間 午前10時～午後4時30分(入館は午後4時まで)

休館日 月曜日、祝日の翌日（但し3/20、4/29～5/7は開館）

次回展示

企画展 「やきものの型」(仮称)

【会期】2017年6月2日(金)～9月10日(日)

【会場】土岐市美濃陶磁歴史館 第2展示室

企画展

土岐市の古窯

― 定林寺古窯跡群 ―

はじめに

土岐市を含む東濃地方は、古くからやきものの生産が盛んな土地で、土岐市内の各地にも古い「窯跡」が残っています。中でも、「元屋敷陶器窯跡」は 16 世紀後半～ 17 世紀初頭にかけて志野や織部といった茶陶や懐石用の食器を生産した窯として有名です。

この元屋敷陶器窯跡と同じ時期にやきものを生産していた窯跡が、土岐市泉町の定林寺地区にあります。「定林寺古窯跡群」と呼ばれ、4 基の大窯と 5 基の連房式登窯が確認されています。

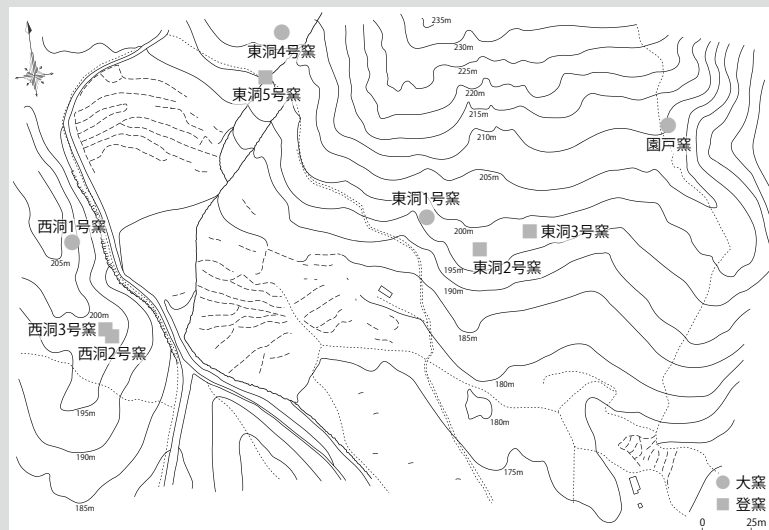
元屋敷陶器窯跡が志野や織部を盛んに生産し、畿内という大消費地にやきものを送り続けていた時、定林寺古窯跡群ではどのようなやきものが焼かれていたのでしょうか。

今回の展示では、定林寺古窯跡群にスポットを当て、安土桃山時代のやきもの生産の多様な側面をご紹介します。

定林寺古窯跡群でのやきものの生産

定林寺古窯跡群は土岐川右岸の丘陵に立地し、標高約 195～210m 付近に築かれています。これらの窯は小規模な谷によって、東洞と西洞に大きく分けられます。窯は焼成室が単室の大窯と複数の焼成室をもった連房式登窯の 2 種類があります。

大窯は、東洞 1・4 号窯・西洞 1 号窯・園戸窯の 4 基、連房式登窯は西洞 2・3 号窯、東洞 2・3・5 号窯の 5 基になります。この合計 9 基の窯で、どのようなやきもの生産が行われたのかみていきたいと思います。



定林寺古窯跡群地形測量図

『土岐市中央自動車道関連遺跡』に一部加筆

桃山茶陶生産の萌芽（16 世紀後半）

定林寺地区でやきものの生産が始まるのは、16 世紀後半の東洞 1 号窯からです。天目茶碗や小皿、播鉢といった、それ以前から伝統的に作られてきた器種をメインに生産していました。小皿では「内禿皿」と呼ばれる内面の釉薬を拭ったタイプが出現します。内禿皿は窯詰め効率を上げるもので、量産化の傾向を見て取れます。また、筒形碗という新しいスタイルの茶碗が少量作られるようになります。茶の湯の世界で、それまでの唐物志向から和物を重用する動きに対応するもので、美濃窯の他の窯でも同じような生産様相がみられます。



窯全景：東洞 1 号窯



天目茶碗（東洞 1 号窯）



錆釉筒形碗（東洞 1 号窯）



灰釉内禿皿（東洞 1 号窯）

桃山茶陶生産の本格化（16 世紀末～ 17 世紀初頭）

16 世紀末～ 17 世紀初頭になると西洞 1 号窯、園戸窯、東洞 4 号窯が稼働し始めます。これまでと同様、天目茶碗や小皿、播鉢を生産する一方で、瀬戸黒茶碗や灰志野、志野の鉢や向付などの桃山茶陶が生産されるようになります。中でも、長石釉を施した志野製品が一定量生産され、中国陶磁の白磁皿を模倣した丸皿や菊皿の小皿類が多数を占めています。しかし、他の窯で見られるような黄瀬戸、鼠志野、美濃唐津などは生産されていませんでした。



窯全景：西洞 1 号窯



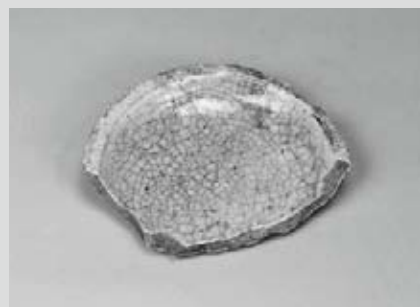
天目茶碗（東洞 4 号窯）



灰釉折縁ソギ皿（西洞 1 号窯）



瀬戸黒茶碗（西洞 1 号窯）



志野丸皿（西洞 1 号窯）



志野向付（西洞 1 号窯）



志野向付（園戸窯）

日常食器生産への転換（17 世紀前期）

17 世紀前期には窯体構造が大窯から連房式登窯に変化し、各部屋を仕切る壁に設けられた炎の通路（狭間）の構造によって前後 2 時期に分けられます。前半は無段斜め狭間の西洞 2 号窯、東洞 3 号窯、後半は有段斜め狭間の西洞 3 号窯、東洞 2 号窯です。尚、東洞 5 号窯は調査が行われていないため狭間構造は不明です。これらの窯では、茶碗や向付などの茶陶類はほとんど作られなくなり、碗や皿、片口鉢の日常食器がその生産の約 90% を占めるようになります。長石釉製品が多数を占め、鉄釉や灰釉は極僅かとなっています。長石釉には鉄絵が描かれたものが多くみられ、小皿には蘭竹文を描いたものが量産されています。



窯全景：西洞 2・3 号窯



長石釉鉄絵丸碗（西洞 2・3 号窯）



長石釉鉄絵丸皿（西洞 2・3 号窯）



長石釉鉄絵片口鉢（西洞 2・3 号窯）

コラム 1 他地区（元屋敷陶器窯跡）との比較

元屋敷陶器窯跡は土岐市泉町久尻に所在する古窯跡群で、大窯である東 1 号窯（A・B・C 窯）・東 2 号窯・東 3 号窯と、連房式登窯の元屋敷窯で構成されています。16 世紀後半の東 1 号 A 窯から窯業生産を開始し、大窯期従来の天目茶碗や小皿、播鉢を主体に生産する中で、筒形碗や向付といった新たな器種を作ることになります。定林寺地区の東洞 1 号窯においても同様な状況がみられるため、この段階では生産様相の違いは認められません。16 世紀末～ 17 世紀初頭には、元屋敷陶器窯跡内の窯が東 2 号窯、東 1 号 B 窯、東 3 号窯、東 1 号 C 窯の順に変遷する中で、瀬戸黒、黄瀬戸、灰志野、志野、鼠志野、織部黒といった多彩な美濃桃山陶を段階的に生産するようになります。志野の生産が主体となる東 3 号窯では、瀬戸黒や黄瀬戸はみられず、鉢や向付は、口口成形後に体部を手で押さえたり、口口成形後、型打ちにより形を整えたものを量産するようになります。また、沓形碗（織部黒）が作られるようになり、西洞 1 号窯などとは生産様相が明らかに異なっています。17 世紀初頭の元屋敷窯では、織部製品が多数作られ、沓形碗や鉢、向付などの茶陶や懷石用食器に関わる製品が全体の約 70% 以上を占めています。一方元屋敷窯操業後、程なくして生産を開始した西洞 2 号窯などでは、日常食器の生産が全体の約 90% を占めているため、元屋敷窯がいかに付加価値の高い製品を量産していたかがわかります。

コラム 2 鉄絵皿の変遷

西洞 2・3 号窯などで量産された鉄絵皿には、紅葉唐草や源氏車、蘭竹文が施されています。これらの文様は、圏線で区画した中に描くものから、圏線がなくなり内面底部のみに描くものへと変化していきます。この文様変化は体部に丸みがあり深いものから、体部が直線的で浅い器形への形状変化と連動したものとなっています。



長石釉鉄絵丸皿（西洞 2・3 号窯）



長石釉鉄絵丸皿（西洞 2・3 号窯）



長石釉鉄絵丸皿（西洞 2・3 号窯）